

誰のための・
何のための「環境」か？
地域の目線で
環境保全について考える



JINKAN CHALLENGERS
TEACHER 02

地球規模の環境保全に
社会的な視点で取り組む

社会環境領域

人間環境学部 環境科学科

武田 淳

JINKAN時代、
バブアニューギニアで
研究テーマに出会う

世界の文化に興味を持っていた私は、大学生の夏休みにバブアニューギニアを訪れました。電気、ガス、水道もない熱帯雨林の村に滞在。その後、足かけ7年同じ村で調査を行いました。

ある時、村の土地が自然保護区になる計画が持ち上がりました。彼らが住む森は、生物多様性が非常に高いからです。自然を守るために保護区を作ることは「いいこと」かもしれませんが、私はある懸念を抱いていました。「保護する」とは、動物を狩ってはいけない、どのように規制を伴います。

一方で、狩猟民である村の人々は、自然を利用しながら生活しています。そのため、保護区を作ることが人々の生活に影響を与えるのではないかと考えたのです。環境保全は誰のためあるべきか、どのように自然を守るべきか。バブアニューギニアで私が出会ったのは「環境と開発」

というテーマでした。その時から自然保護区の中で暮らす人々を対象に研究を行っています。

青年海外協力隊員として
環境先進国コスタリカへ

自然保護区の研究をするならば、現場を知りたいと思い、再び外へ飛び出す決心をしました。青年海外協力隊として、コスタリカの国立公園で働く機会を得て、社会調査員として2年間実務に従事しました。コスタリカは、途上国でありながら環境政策が進んだ国として知られています。国土の1/4が自然保護区に指定されており、これらの保護区は、エコツーリズムの資源として活用されています。環境保全と経済発展を両立してきたことがコスタリカの国際的な評価に繋がっています。

しかし、現場では問題もありました。公園を作る時、以前からこの土地で暮らしていた人々が強制退去に合い、公園と住民の間に対立が起こっていたのです。このような状況を目の当たりにした時から、「環境保全」と「人の生活」のバランスを考え直すようになりました。

環境に対する向かい合い方は
もっと多様であるべき

開発途上国の環境問題の歴史は、日本と大きく異なります。日本では、高度経済成長期に

おきた公害のように、実際に「痛み」を経験しながら環境保全の重要性が認識され、改善の取り組みが行われてきました。一方、途上国の環境政策は、先進国の影響を大きく受けます。とすれば、「なぜ環境を保全が大切なのか」「自分たちの社会に合う環境保全の手段は何か」ということを、人々が熟慮する機会がないまま、先進国で生まれた思想や制度を受け入れることになります。私が考えているのは、「国や文化によって、環境保全の形はもっと多様であってよいはずだ」ということです。

例えば、一見して無秩序に自然を利用しているように思われがちな途上国の人々の生活の中に、実はたくさんの「自然を守るための知恵」が存在していることが近年の研究で分かっています。生活の中の知恵を活かすことも、環境保全の手段になるかもしれません。

行政と住民どちらにとってもメリットのある環境保全とはどのようなものなのか。現地に立ってみたいとわからなかった数々の研究事例が、将来のコスタリカをはじめ、途上国・新興国における環境保全活動のヒントになると信じています。

今後の新たな試み

今私が注目しているのは、ウミガメ保全の現場です。写真のヒメウミガメは絶滅危惧種です。そこで、コスタリカでは産卵地の保護が盛んに



コスタリカで活動を共にした同僚たち(上)。コスタリカの海岸には世界有数のウミガメの産卵地があり、ウミガメの保全を巡る動向について現在も同地に赴き調査しています(右)。

行われています。一方で、コスタリカの沿岸地域では、伝統的にウミガメの卵を食べる習慣があります。つまり、ウミガメを「イキモノ」と考えれば、自然保護の問題になりますが、「タベモノ」と考えると文化や生活の問題になります。保護と利用のバランスをいかにとるべきか。今後の現地調査で得られた成果は、授業で還元していきます。



村を去る時に村人総出で踊ってくれた舞踏の写真。

TOPICS



バブアニューギニア滞在中に居候していた家族とは今も交流があります。印象深い思い出は、私がマラリアにかかって重症化してしまった時、居候先の父母が涙を流しながら寝ずに看病してくれ、緊急搬送を手配してくれたこと。今も思い出すと命の恩人に感謝があふれます。写真はバブアニューギニアの村を去るときに、家の主人が彫ってくれた像。民族の成り立ちを説明する物語に登場する精霊をかたどっています。



バブアニューギニアでは、人口約3000人の狩猟民族の村に滞在。家族と同じものを食べて暮らしながら研究しました。

[PROFILE]



助教 武田 淳
例)JTBC関東、コスタリカ共和国環境エネルギー省(青年海外協力隊)を経て、横浜国立大学大学院博士後期課程修了(博士:学術)、日本学術振興会特別研究員(DC2)、青山学院大学非常勤講師などを経て現職。

[主な担当科目]

- 国際協力論 ● 環境社会学 ● 環境と開発
- ソーシャルビジネス論 ● エコフィールド社会実習 など